
鏡ノ園

渡邊 愛希翔

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡ノ園

【Nコード】

N0378M

【作者名】

渡邊 愛希翔

【あらすじ】

隣の空き家には美しい洋館と庭があった。

庭には、生き生きとした草木が芽吹き、美しい花々が咲き乱れていた。

そして美しい庭の中心には、美しい装飾を施された大きな鏡と、それを守るように寄り添った大きな黒い犬がいた。

前

隣の空き家。

当時三歳だった私は、その空き家に何があるのか知りたかった。

外から見ても分かる広い敷地、春になると花の甘い香りが漂い、その中心には綺麗な古い洋館が佇んでいる。

でも、これは自分の家の二階の窓から見たほんの一部。

大人に聞いても、何も知らないと言った。子どもをあしらう為では無く、本当に知らないという事を私は直感で悟った。

だからこそ、何があるのか見てみたかった。美しい洋館に何があるのか……

親が出かけた日、婆やの目を盗み隣の空き家に入ってみることにした。

私の親は、毎週水曜日に三時から六時まで出かけて行ってしまう。婆やが遊んでくれるけど、私はその時間が、退屈で退屈で仕方なかった。

私は、三日後の水曜日に空き家に忍び込む計画を立てた。

とても、三日後が楽しみだった。

中

水曜日。

今日は待ちに待った水曜日。

私は、あの洋館に行ってみることにした。

黄ばんだ赤レンガの塀の一部が、ちょうど私の体の大きさに合わせたような穴がぽっかりと開いていた。

少し中を覗き、人がいない事を確認すると私は穴をくぐった。

そこは裏庭だった。

私と同じくらいの背丈の女神像が薔薇の花に囲まれている。

薔薇をさらに囲むように道があり、その道の外には色とりどりの薔薇が植えてあった。

人がいた形跡なんてないのに、雑草が一本も生えておらず、薔薇は生き生きとしていた。

裏庭を抜けると、洋館の前に出た。

洋館には蔭が這い、窓のカーテンは全て閉められていた。

でも、そこに不気味な雰囲気はなくて、久しぶりに祖母の家に行った時のような懐かしさと温かさがあった。

洋館と向かい合うように植物園があった。

花でできた門をくぐると、花の甘いにおいが漂ってきた。

そこには花が咲き乱れ、大木が青々とした葉を茂らせ、絶景と呼ぶに相応しい庭が広がっていた。

目の前には階段があり、庭に入るにはそこを駆け下りる以外に道がない。

少し怖かった。

何か、自分の入ってはいけない場所に入って行こうとしてるよう
で。

でも、美しい庭の魅力に幼い私は抵抗しなかった。

今から自分のすることが、どれほど愚かしいことかも知らずに…

…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0378m/>

鏡ノ園

2010年10月20日09時16分発行